

浄土

monthly
JÔDO

2012 6 June



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

東急大井町線

九品仏駅

東急大井町線は、東京都品川区の大井町駅と神奈川県川崎市高津区の溝の口駅とを結ぶ電車です。旗の台、大岡山を過ぎ自由が丘を通ります。自由が丘からしばらく直線に進み、右にカーブすると九品仏。駅北側の浄土宗浄真寺に安置される「九品佛」（上品上生から下品下生までの九体の阿弥陀如来像）が駅名の由来です。九品仏―等々力間はほぼ直線で、隣の駅が見通せます。このあたり東京23区唯一の深谷＝「等々力深谷」を形成する谷沢川が左に並行しています。やがて大きく左へカーブして渋谷から来る田園都市線と合流し、二子玉川へと続きます。

6月

浄土

2012/6月号 目次

浄土アーカイブス●誌上ライブ러리 座談会 法然上人を偲んで 第三回	
武田泰淳 佐藤密雄 仁戸田六三郎 司会・宮林昭彦	2
会いたい人 岸部一徳さん①	関 容子 10
連載小説 渡辺海旭	前田和男 18
響流十方	小村正孝 24
江戸を歩く	森 清鑑 28
極楽に帰った法然上人	石丸晶子 36
誌上句会	選者＝増田河郎子 44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう 47
編集後記	48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 泰雲の美味探訪——京都祇園 千ひろ——



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイブス

誌上ライブラリー「一九六一年三月号『本誌七五〇年遠忌記念号』より」

法然上人

を
偲
ん
で

座談会

とき●昭和三十六年一月二十五日
ところ●上野池の端「鉢ノ樹」

第三回

佐藤密雄

(さとう みつゆう)

大正大学教授 文学博士

一九〇一年生、梵語、パーリ語による着実なる研究を進め、『論事覚音註』(カタールヴァツ・共著佐藤良智)、国訳『薩婆多毘尼毘婆沙』、『分別論上』、『論事』、『分別論下』、『仏祖統記』(上・中・下)、大著『原始仏教教団の研究』、『無量寿経講義』、『大乘戒』、『仏教教団の成立と展開』、『律蔵』、『大乘成業論』

一九四一年、高德院(鎌倉大仏)住職。70年、勸学、77年、知恩院副門跡就任。二〇〇〇年遷化。

武田泰淳

(たけだ たいじゆん)

作家

一九二二年(明治45年)2月12日—一九七六年(昭和51年)10月5日第一次戦後派作家として活躍。主な作品に『司馬遷』『蠅のすゑ』、『風媒花』、『ひかりごけ』『富士』『快樂』など。兄は水産生物学者・東大教授の大島泰雄。妻は随筆家の武田百合子、娘は写真家の武田花。伯父は、僧侶・仏教学者・社会事業家の渡辺海旭。

仁戸田六三郎

(にえだ ろくさぶろう)

一九〇七年—一九八一年
早稲田大学教授 文学博士

宗教哲学。著書に『仁戸田六三郎宗教哲学論集』『悪の研究・序説』『復活について』『神々と神への序説』『悪人正機に関する私観』『タデマエとホンネ』『日本人の宗教意識の本質』等々。

宮林昭彦

(みやばやし しょうげん)

司会

一九三二年 長野県に生まれる

一九五五年 大正大学大学院修士課程修了

大正大学講師、同助教授を経て

一九七八年 大正大学仏教学部教授

一九九七年 同人間学部長

二〇〇二年 同定年退職

現在 大本山光明寺法主

主要著書

『仏教とその流れ』(浄土宗出版室)

『法然上人と浄土宗』(みち書房)

易行道と難行道

司会 武田先生の仰言ったことで、仁戸田先生ひとこと。

仁戸田 やっぱりね、この親の遺産を食い潰して飲み潰していく、道楽息子のいるようにね。やっぱり法然上人があゆまれたプロセスの苦しみを、この御遠忌にあたり、この偉大さが、濡手に粟で出来たものじゃないということもあわせて、つまり、ひとつの人間構成、すなわち人間学的な角度から、もういちど再確認する必要があるんじゃないかと思うのです。

しかしながら、私は愚鈍なもので、愚問を発するわけなんです、その点を強調しますと、この、難行道に対する易行道の線ですね、これが普通一般に、すこしヒビが入っている、それはつまり誤解なんです、易行道をたてるためには難行道を通じなければならぬんじゃないか、といったようにとる人もあるんじゃないか、そうなると、念仏為先の易行道の線が、異安心的な線で動揺する可能性がある。

この門を開いて、実はそういうものじゃないんだと、いわゆる三心論ですね。つまり、法然上人の仰言ったことと、そこまでに至る法然上人御自身の憂き艱難、といったようなことと結びつけなきゃならないけれども、これは、ある線では、切りはなして考えなければならぬ、ということですよ。これが、法然上人のおしえを現代に生かす、という方法の問題で、ささいなことですが、私はちょっとそんな気がするわけなんです。

司会 たしかにそうですね。

仁戸田 裏をかえますと、この念仏を唱えれば、浄土に往けるんだ、という上人の、や

さしいんだ、と仰言っておられることは誰れにもやさしいことなのか、法然上人御自身やさしいことだ、とお考えになったことなのか、深さと広さをもっていない私なんかにはちよいちよい疑問になるんです。言葉は同じでも、内容の格差がそこにあるんですね。

いわゆる、信心というものはなくてですね念仏を唱えれば忽然として浄土が訪れる、といったようなことから、へり屈がはじまりますがね。これはどうもなまじっか知恵がありますと、法然上人の仰言ったことが、一番むずかしいじゃないか、と、逆説みたいものが飛び出ちゃうんですね。それは、いま非常に効く薬が出廻っておりましてね、私も明治生まれの人間は、漢方薬というようなものでヂワリヂワリ（笑）煎じ薬をせんじて飲んでね。昔は、肺炎になりますと、もうしめきつてね、めばりして部屋を温つたため、フキンに芥子をぬって腕にはって電報を方々に打つといったようなわけだったんですが、いま肺炎になっても、ペニシリンなど注射しますと、一週間ぐらいで元気に会社に出かけられる、いわゆるインスタント時代ですね。そういうことになれていきますと、念仏唱えていると、数は百万べんでなくとも、ある数唱えれば浄土へ行つて借金取りもうぐいすの声、というんじやなきやピツタリこないというような一般の気持ち、きわめて強いんじゃないかと思うんですね。

佐藤 浄土の易行道といつても、易々たるものじゃない。これは、法華難思の坂、浄土難信の道とあるごとく、法華経は思惟する、道理を考えて悟るということは、本格だが思い難く、仲々理解しがたい。それと同様に、浄土は信じがたい。これを信じていくところに浄土教の易行道の一番むずかしい問題がある。

どうして、これは信じ難いかというと、現在でもよく分る。現代の坊さん達は、何かし

ら理屈をつけて、仏教的原理を裏づけして、極楽というのはこうだ、というような説明をする。そして、むづかしくしている。むづかしくしている、というのは難信ですね。信じさす、自分も信ずるということができないから、それを振りかえているんですよ。それを振りかえて、浄土だって、そんな荒唐無稽なものじゃない、ということを理論によって：

仁戸田 振りかえているでしょう。その振りかえ手形が、現代は段々通用しなくなっているね。

佐藤 法華難思のような理論を浄土教のお説教でも、宗学でも説こうとするものだから分らなくなってしまう。だけど、これは絶大な勇氣をもって信じせしめねばならんし、又信するにも、やさしい程信じがたい。

たしかに法然上人のように、苦勞しておいでになった方が、さもなくば余程純心な気もちで精神とたたかわねば、信じられぬものだ。その点でむづかしいと思うんですよ。

司会 たしかに、信じがたいものを克服するのは、難行をやると同じくらいむづかしさだと思うんですが、いかがでしょうか、武田先生。

最も自然的、必然的な言葉

—南無阿弥陀仏—

武田 そうそう、それでね、僕はね。往生ということは、割にすなおに信じられるんですね。信じられるというより、往生というより仕方がないんだな。人間の持っている動物性とか社会性、人間のもっている矛盾をつきつめていくとね、往生するというのは、否応な

しに必然のような気がするんだね。その必然なものを象徴する言葉がね、南無阿弥陀仏ということなんだ。まあ、これは理屈になっちゃうけどね。

僕は、南無阿弥陀仏というのは、人間の必然性をあらわすのに、象徴的な言葉で法然上人も考えて居られたのではなからうか。それを、一つ一つ説き聞かせるよりも、極楽とか往生とかというものを、はつきりいつてね、念仏を唱えれば救われると。それは、虚言いつわりのないことなんだけれど。それを獲得する方法として、どうせ往生するなら、難行道をやってもいい、と僕は思うんだ。しかしやらない人には僕は反対しないんだよ。

だから、むしろ念仏を唱えて、食事をしているお百姓さんなんか、好きなんですがね。自分は仲々そうできないから。そう考えると往生ということを、自分においてどう考えるかということによって、信心というのは決まるんじゃないかな。

往生というのは、往って生きることでしょう。往って生きることとは、どういうことだろうか、僕は僕なりに考えているんだ。だから、学問的にいっても、法然さんの云われたことと、ちっとも矛盾なく感じられているわけなんだね。それを、僕は、人にそれをどういう方法でいうか、ということを考えるよりも、まず先に、自分が往生ということはどう考えるか、ということをやろうと考えているわけなんですよね。

法然上人の文章というのは、充実していて無駄がなくて、わざとらしくなく、徹底している。それは何かというと、やっぱり、人間の上にのしかかっている何かを、自然のようなものを、完全な形で把握していたんじゃないか、と思うんだな。だから、それが、どうしても念仏ということになったんだから、そうすると、僕らも、法然上人までは、深いところは考えられないけれども、自分という存在がどういうふうにあるか。

世界のどこかにおいて起っている犯罪に対し、全く無関係にあるということは云えないですから、その意味でも、僕は一番すなおに受けとられる考え方なんだな。

ほかの、いろんなテーゼがありますよ。平和共存というのね。実際は平和共存じゃないわけなんだ。

ところが、南無阿弥陀仏と法然上人が云った時には、何らの野心もなければ、権力を保持しようという気持ちもない。本当にこれを云わなけりや仕方がないから云われた、と思うんですよ。それが尊いんだな。言葉は時代時代で新しいものが、どんどん出てくるんだけれどもこういう言葉は、仲々ないんですね。

仁戸田　そうですね。若い人が「チャオ」なんていうのを止めて、南無阿弥陀仏といった方が余程いい。(笑)

司会　本日はいろいろ有難うございました。ではこの辺で。

(おわり)

講師

石丸晶子 法然上人と 平家の人々



いしまる あきこ

1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然一式子内親王伝』（朝日新聞社）、『歴史に咲いた女たち—源氏の花 平家の花』（廣済堂出版）、『法然の手紙』（人文書院）、『お手紙からみる法然さま』（浄土宗出版）ほか多数。

会場 東京芝 大本山増上寺 慈雲閣1Fホール

□東京都港区芝公園4-7-35

□地下鉄都営三田線御成門または芝公園下車徒歩5分
都営浅草線大門下車徒歩5分
JR浜松町徒歩10分

6月22日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演(3:30終了予定)

会費 1,000円

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

連載

会いたい人 関 容子

岸

部

一

徳

さん

①



撮影／タカオカ邦彦

この三月、浅草の平成中村座夜の部を観に行ったら偶然お隣りの席が柄本明さんで、そのお連れが岸部一徳さんだった。

中村勘太郎改め六代目勘九郎襲名披露の「口上」に笹野高史さんが袴姿で居並ぶというのは歌舞伎界ではとても異例なことなので、笹野さんから是非観に来てほしいとお二人にそれぞれ誘いの電話があったという。

柄本さんも笹野さんも入っている私のインタビュー集（『舞台の神に愛される男たち』講談社刊）が近頃か出ることを柄本さんに報告し、そこで今度は岸部さんにもゲストとして登場していただきたいとお願いと、でも僕は舞台はやってませんよ、と耳に憶えの物静かな低い声が返ってきた。

それでも、映画俳優としての岸部さんには『死の棘』（90年）で日本アカデミー賞最優秀主演男優賞ほか数々の演技賞を受けた名演があるし、多くのテレビドラマではたとえば山田太一作『ありふれた奇跡』（09年）で女装

趣味の男を怪演している。その落差の大きさに私はいつも目を見張らされていた。

それに何よりもつい最近、日本武道館で一萬三千人を熱狂させた四十年ぶりのグループサウンズ「ザ・タイガース」全国ツアーのフアイナルコンサートステージが話題になったばかりだ。

岸部さんは初めての人と会って話すことがちよつと苦手のように見受けたが、今回何となく柄本さんのおかげもあつて、後日の約束が得られたのだった。

「柄本明、ベンガル、綾田敏樹とは昔からの知り合いです。東京乾電池の舞台はよく観えますから。下北沢の狭い劇場とか、新宿のゴールデン街劇場とか、少人数のお客に低料金で芝居見せて、やつぱり好きでなきゃできないことですよね。たまに時間があると一緒にいろんなところに行きます。あのときは勘三郎さんとも親しいエモツちゃんからも誘われま

若かりし頃の岸部一徳さん（右端）、となりがお父さん



したので。勘三郎さんとは僕は映像で二度共演してまずけど、あんまりからむところなかった。一つはテレビ東京の十二時間ドラマで、あちらが秀吉、僕は千利休。もう一つは阪本順治監督の『顔』という映画で、藤山直美さんが顔を整形しながら逃亡し続ける犯罪者の役で、勘三郎さんはトラックの運転手、僕はラブホテルの社長で、彼女が自転車に乗れないのを教えてあげたような役でしたね」

しかし俳優関連のことはあとまわしにして、まずザ・タイガース時代の話から始める。

岸部さんは47（昭和22）年、京都で生まれた。三男なので名前は修三^{しゆさん}。タイガースでの芸名は読み方を変えて岸部おさみ。すぐ下の弟に岸部四郎（シロー）がいる。

「父親は職業軍人で、憲兵少尉でした。明治生まれにしては背が高くて、一七八（センチ）ありましたからね。戦後は定職につかないで、開碁の道場を開いてみたり、古美術に凝ったりしてましたが、ブラッとして行っってはまた

うちに戻ったりする、そういうタイプでした。僕たちは六人兄弟ですけど、外にもいるんで、九人なのかな（笑）。父は歌舞伎や新派や松竹新喜劇が好きで、僕が小学校へ上がる前から『婦系図』のお薦主税のせりふなんかを聞かせてくれましたね。別れる切れるは芸者のときに言うものよ、とかね。僕たち子供は親父のそういうところをちよつとずつ受け継いでいるようです」

少年のころからエレキのサウンドが好きで、高校に入るとすぐに学校をやめ、まずは大阪に出てバンドを結成する。

「沢田研二以外のメンバーは、小中高のどこかで同級だった仲間です。僕と森本太郎と瞳みのると加橋かつみの四人で『サリーとプレイボーイズ』というグループをまず作りました。サリーというのは僕のニックネームで、リトル・リチャードの『のっぽのサリー』（『ロングトールサリー』）から来ています。一八一（センチ）ありますからね。森本は本

名からそのままタロー、加橋は前歯がトツボ・ジョジョ（漫画映画のネズミ）に似てたんでトツボ、瞳は子供のころからキュービーに似て可愛いかったからビーだと本人は言うんですが、一人でよくしゃべるんでビービーうるさい、というんで僕らはビーと呼んでたんです。のちに加わる沢田は、東京へ行ってからニックネームをつけることになって、女優のジュリー・アンドリュースみたいにきれいな顔だということで、ジュリーになったようです」

京都でバンドボーイをしていた沢田研二と知り合い、彼の加入によってグループの名前を「ファニーズ」に改称。歌主体に路線を変えし、五人は大阪で同じアパートに住み、毎晩「ナンバ一番」というジャズ喫茶でビートルズやローリングストーンズの曲を演奏していた。

「一年くらいして、ゲストに内田裕也さんが来て、僕らがその前座で出てたときに、階段

ですれ違ったら、君たち東京へ来て俺と一緒にやらないか、って声をかけられたんです。

それがキツカケでナベプロ（渡辺プロダクション）の人たちが見に来て、京都の旅館でそれぞれ親が立会って契約して、上京するんですから、裕也さんは恩人なんですよ」

階段でのすれ違いと聞いて、四十年以上も前のなつかしい情景が鮮明によみがえった。

当時私は放送関係の仕事でテレビ局によく出入りしていたが、ある日、東京12チャンネル（現テレビ東京）の狭い階段を登っていると、上から物すごい勢いでドドツと駆け降りてくる数人の足音が聞こえてきた。思わず踊り場の片隅に立ちすくんでみると、すぐにミリタリー・ルックの若者たちが姿を現し、その先頭が白皙の美青年ジュリーだった。彼らは風のように私の横をすり抜けて行ったが、落着いた足取りで最後に降りて来た背の高い人が、はにかむように笑って目礼してくれた。以来私はテレビでものつぽのサリーに

ばかり目が行くようになった。

「グループサウンズのパイオニアはザ・スパイダースで、関西にいたころ僕たち全員がファンクラブに入っていました。僕はただああいうふうになって人気も出たら女の子にもてるだろうとか、単純な考えしか持ってなくて、とにかく京都という窮屈な土地から抜け出したい一心で、そのためにはまず大阪へ出て、それから東京をめざしたわけです。’66年11月に上京して、すぐにフジテレビ系列の『ザ・ヒットパレード』に初出演するんですけど、作曲家で番組のディレクターでもあったすぎやまこういちさんが、関西から来たバンドだから名前はザ・タイガースがいいだろう、と命名してくれたんです。本当は加橋、森本、瞳はジャイアンツファンだったんですけど、実力者に異をとなえたらまずいと思って、誰も何も言わなかったですわね」

’67年2月、シングル『僕のマリー』でデビ

ユー。続く『シーサイドバウンド』、『モナリザの微笑』のヒットでザ・タイガースはたちまち国民的アイドルとなる。全国の追っかけ親衛隊の数は断然トップで、荒井由実（現・松任谷由実）は八王子支部長だったというのもおかしい。

「沢田がリードボーカルで、甘くて艶のある中間の声、加橋が高音がよく出て、僕は低い声だったし、たまたまそういう変化のある声域を持つてるメンバーが揃ってたという特徴がありましたからね。そのころのほかのグループはユニゾンで歌ってたのが多かったし、みんなの音域が近くてたまにハモっても大きく幅が広がらないですね。僕らはすぎやまさんのコーラスのつけ方がよかったです、『君だけに愛を』なんか爆発的大ヒットでしたからね」

あのころ誰もが「君だけにいい」とかよく口ずさんだものだった。

「楽器はみんな自己流です。若者はほとんど

がギターを持ってましたから。僕らのメンバーでは二人ギターがいて、ベースとドラムがいなかったんで、瞳がドラムを勉強して、僕がベースに回ったんだけど、ベースというのは地味なポジションで、それがあんまり好きじゃなくて、僕は性格は地味なんですけど、目立たないのは好きじゃなくて（笑）」

当時「レッド・ツェッペリン」のジョン・ポール・ジョーンズがテレビで見た岸部さんのプレイに感動して、彼に会いたいと言ったという話がエピソードとして残っている。

「本当ですかねえ。本当だったらうれしいですね。でも、会いたかったですね」

その後、ザ・タイガースは69年3月に加橋が脱退、新メンバーとして岸部シローが加わるが、71年1月24日の日本武道館でのコンサートを最後に解散。結成から四年目だった。

瞳みのはそのまま京都に戻り、芸能界からまったく縁を切る。

「前の日までザ・タイガースだった彼が、年

ザ・タイガース時代の岸部一徳さん（右端）



下の人に混じって高校に入り直して、それから大学へ行って、慶応高校の漢文の先生になるわけですからね。すごい意志の力だと思いますよ。彼は会社の言いなりのアイドルとして朝から晩まで働きづめの生活というのが、最初にめざしたものと違ってきたことに疑問を持ったんだと思います。解散したその日から何十年も音信不通だったのがみんな心に引っかかっていたんです」

それが去年から今年にかけてのザ・タイガース再会の全国ツアーに結びつくわけだが、そのキツカケを作ったのは岸部さんの作詞による「Long Goodby」。三番の歌詞を沢田研二が書き加え、森本太郎が作曲して、NHKテレビ「ソングス」で沢田が歌ったのが、瞳みのるの胸に響いてのことだった。

「Long Good'by」

こんなに長い別れになるなんて

あの時は思わなかった

23才の時だったね

いっしょに帰ろうって言われたけど

僕には 何処に帰るのか

わからなかった

君はたぶん 友達に戻ろうって

言っただね

ほんとうに ほんとうに 楽しくて

いつも いつも いっしょにいた

永遠に今が続いて行くと

思っていた あの頃に

こんなに長い別れになるなんて

あの時は思わなかった

1月24日 最後のコンサート

夢から帰って行った

僕には 何処に帰るのか

わからなかった

だから たぶん

僕は笑っていたかもしれない

ほんとうに ほんとうに 楽しくて

いつも いつも いっしょにいた

永遠に今が続いて行くと

思っていた あの頃に

僕らはきれいな大人になれたかな

歳ばかり重ねてきたな

30年以上隙間は重いけど

今なら笑い合いたい

僕には君の決断がまぶしかったよ

君は今は 東京の何処かで

暮らしてるんだ

ほんとうに ほんとうに 君のこと

いつも いつも 気にかけてる

永遠の今が続きならば

一度酒でも飲まないか

(この項つづく)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十二回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

異境で改めて導師の教えを想う



「他者の困窮への冷淡」 は仏教が助長？

「日本では、国民のほとんどが仏教徒なのに、なぜ救貧活動ではわずか一パーセントのキリスト者の後塵を拝しているのか」

宴いよいよたけなわの居酒屋談義でプロテストアントが「急所」をついてきた。仏教徒である自らも答えに窮し、いまでも悩んでいる深奥に刺さるテーマだけに、海旭は異教の友にどう話せば理解してもらえるかしばし沈思した。そして、三杯目のビールを干してから徐ろに答えた。

「日本人のなかには、貧乏や病氣は前世の因果か、何かのたたりだという意識がある」

「それはまた非科学のきわみだ」と無神論の自由思想団があきれ返った。「やはり日本は三等国。一等国入りなど夢のまた夢だ。それにしてもそんな時代錯誤の迷信がいまもまかり通っているとは、いったいなぜなのだ。まさか、宗教が日本では仏教徒が大半だそうだから、仏教がそれを助長しているのではな

いだろうな……」

新旧キリスト者が興味をつのらせて身を乗り出すと、海旭は目をふせ、「いや、情けないことだが、理由はその『まさか』だ」と素直に認めた。「仏教には『因果応報論』という考えがある。本来は業（カルマ）と輪廻という世界観・生命観にかかわる深遠なる哲理なのだが、病氣や貧乏になるのは前世で悪いことをしたから自業自得だ」という俗説に援用されてしまったようだ」

「宗教の俗流化は洋の東西を問わず、世の習いだ」と社会民主党が議論に棹をさした。「たとえば、キリスト教でも、そもそもユダが十三番目の使徒だという誤った説を論拠に、十三を忌み数とするのと似たようなものだ……」

カトリック刷新派が反論をしようと口を開きかけたが、海旭はそれを察して、「また、日本は地縁と血縁がきわめて強い」と議論が俗流宗教論へと流れそうになるのを押しとどめた。「それが日本社会を支えてきたのだが、その裏返しとして、親族や同郷以外は赤の他

人とする社会通念が根強い。これと先の「貧困や病苦は因果応報」の俗説が重なって、見ず知らずの人間の苦しみには冷淡な風潮があるいっぽう、困窮者のために献身するのはよほどの物好きと変人扱いされる。だから日本では西欧のようには他者に対する慈善が一般庶民には理解されにくいのだ。そんな社会背景があるものだから、わが仏教も救貧にはあまり熱心になれなかったのかもしれない。」

「恤救規則」という形だけの救貧政策で明治政府が国民をごまかすことができたのも、以上の理由で、仏教が救貧に熱心でなかったからだだったといえなくもない。海旭は内心で忤怩たる思いをつのらせた。

キリスト教排撃の 公認派「護法運動」の危うさ

「そこへ禁を解かれたキリスト教が目をつけたというわけか」と社会民主党が海旭の内心を代弁した。「その結果、仏教は救貧活動でキリスト教の後塵を拝することになったと」「目をつけた、という言葉はいかなものか」

とカトリック刷新派が目を怒らせて割って入った。「布教のためにあざとく策を弄したわけではなからう。はるか東洋のはてに赴いたわが同胞は、愛による救貧を当然やるべくしてやっているまでのことだ。むしろ問題は救貧をおざなりにした仏教にある。仏教も博愛を掲げていると聞いているが、それは御題目にすぎないのか」

「それはちと酷だろう。ワタナベ一人が負える問題ではない」と自由思想団がいなした。「しかし、仏教もだらしないうるか、自ラ城を明け渡すようなものだ。過去の経緯や社会通念を超えて、今からでも遅くない、キリスト教の救貧活動に学べばよいではないか」「僕もそう思う」仲間の応酬をだまっていた海旭が議論に復帰した。「僕がかねてから、仏教は大いにキリスト教に学ぶべきだ」を持論にしているのだが、そうは思わぬ仏教徒たちが力をもって跋扈しているのだ」「教団としては、教義上、それはむしろ当然の姿勢ではないか」とプロテスタントが問い返した。

「いやいや彼らの問題は」と海旭は応じた。「キリスト教に学ばないどころか、キリスト教を排撃せよというところにある」

「なに？ 中世ならともかく、文明開化の時代にキリスト教を排撃するとは……」とカトリック刷新派は首を傾げた。

「それ以上に彼らが問題なのは」と海旭はつづけた。「国と結託してキリスト教を排斥しようというところにある」

「なに、それは大問題だ」つまらなそうに聞き役に回っていた社会民主党がやおらビールの盃を卓上に置くや、口を尖らせた。「そもそも教会と国家が結託すると、庶民にとってどのようなことになるか、わがドイツをふくめヨーロッパ中が体験をしたことだ。宗教と国家とは距離をもたねばならぬ」

海旭が問題にしたのは、「公認派」という仏教内部のグループで、明治の言論界に大きな影響力をもった仏教哲学者、井上円了らが唱道したものだ。廃仏毀釈を口火にした新政府の露骨な神道国教化政策が進行するなかで、それに抵抗をしながら勢力をのばしてき

たキリスト教を排撃して、国家による仏教の「公認」を得ることで、「護法」——仏法を護ろうというものだった。

救貧活動で仏教徒がキリスト者の後塵を拝している理由としては、「俗流因果応報主義」と「親族以外は赤の他人主義」の他に、この「公認派の護法運動」があり、実はそれがつとも大きな要因といえるかもしれないかった。

「仏教が国を精神面から支えるのは大いに結構だと思う」と海旭は言った。「だからといってキリスト教を排撃して国におもねるのはこまったものだ。キリスト教と仏教の垣根を取り払って学びあうときではないか。それが宗門のためになり、ひいては社会のため、国のためにもなる。キリストは敵ではない。仏教徒である井上円了ら公認派の護法運動は、かえって仏教の蘇生をさまたげはしないか」「なるほど、その志やよし、だ」と自由思想団が言った。「しかし、ワタナベ、なぜ、おぬしはそう思うようになったのだ」

海旭の頭の中に「福田行誠」と「兼学」と

いう二つの言葉が勃然と浮かんた。浮かんたが、さて異邦の友にどう説明したものか。海旭はしばらく考え込んでから、ぼつりと言った。「僕を仏門に導いてくれた仏教界の大人物から教示を受けたのだ」

そう答えて、今の自分の原点がどこにあったのかを改めて思い知らされた。「ちよつと待ってくれ、頭を整理して説明するから」と海旭は言うと、しばし福田行誠との運命的出会いの回想に没入した。

導師・福田行誠と兼学の精神

福田行誠とは、江戸末期に生まれ、伝通院住職、増上寺法主、知恩院門主、浄土宗管長を歴任。一日に念仏を七万遍八万遍も唱える修行で尊崇をあつめ、一宗門を超えて、「八宗の泰斗」、すなわち浄土宗、浄土真宗本願寺派、同大谷派、日蓮宗、曹洞宗、天台宗、真言宗、臨済宗の有力八大仏教諸派の共有の大学者とまで呼ばれた名僧であった。

行誠の第一等の功績は、廃仏毀釈で弱体化を余儀なくされた既成仏教界全体の再興に尽

力したことだが、その名を高らしめたのは、明治五年四月二十五日、太政官が「自今僧侶の肉食妻帯畜髪は勝手たるべき事」を布達した折、こう痛罵したことであった。

「馬にして角ある者なく、鹿にして鬣（たてがみ）ある者なく、俗にして剃染の者なく、僧にして肉食の者なし。蓄髪肉食のものを指して僧なりと云わば、是馬を指して鹿というにあらずして何ぞや」

これは新政府の宗教政策への弾劾であったが、と同時に、いやそれ以上に、内輪の仏教界への叱咤であり檄でもあった。

その行誠が仏教再生のための持論としたのが「兼学」であった。要は一宗門の教義だけを学ぶのではなく、あらゆる宗門の教義をひろく学べというものである。ふつうに考えれば自明の理（ことわり）だが、幕末から維新にかけては、いやそれ以前から、日本の仏教界はそうではなかった。いずれの宗門でも唯我独尊が跋扈横行していた。そして、それが仏教の自壊をもたらした。廃仏毀釈はそれを促進させた引き金にすぎない。それを誰より

も直感し危惧した人物が行誠だった。

家業が傾き口減らして仏門に入り、まだ仏教の何たるかも知らない少年であつた海旭が、仏僧でありたいと真に目覚めたのは、最晩年の行誠が隠棲していた深川本誓寺境内の寒林舎で聞いた法話であつた。と、海旭の脳裏に往事の興奮が昨日のように甦つた。行誠が読経を終えて、百人ほどの弟子を前にこう語りだしたときのことだった。

「そも兼学とはなんぞや、なぜ必要なのか。本日は、この兼学について、かねてよりの持論をみなに語ることにする」と行誠は切り出して、いきなり核心に入った。「水、大なれば大魚生ずるも、小水にはめだかも生ぜず。仏法もしかりだ。その昔、仏法は大なりしが故に、高僧が続々と輩出したが、今や仏法小水の故にボウフラよりほかは生まれてこない」聴衆の間から「われらはボウフラ坊主か」とさざめき起きるのをよそに、海旭は勇を鼓して雲上の大僧正に、生来の吃音をいっそう激しくして訊ねた「ど、ど、どうすれば兼学はかなうのでしょうか？」

すると行誠は笑みを湛えて応じた。「今年の九月にわが宗門の僧侶を育てる学校ができる。そこへいけばたっぷり時間をかけて学問ができるが、どうだ、入ってみるか」

「ぜ、ぜひ入りとうございます」と海旭は顔を輝かせて答えた。「も、もしその学校で学ぶことができれば、兼学の精神を仏教を超えてひろげとうございます。ち、チベットのラマ教、ヒンズー、回教さらにはキリスト教、を比較検討して学びとうございます」

ヒンズーまでならまだしも、回教、キリスト教にまで兼学の対象を広げるといふ弱輩の恐れを知らぬ物言いは、並みいる高弟たちをひやひやさせたが、行誠は相好をくずして言った。「そうか、その意気や、大いに結構。大いに結構」

かくして海旭は行誠の推挙があつて、開校されたばかりの浄土宗東京支校（芝中学・高等学校の前身）へ入学。明治二十年九月、海旭十五歳。思えば、ここから海旭の仏教学徒としての第一歩が始まったのである。

（この項つづく）

欲望をかなえたいと望み貪欲とんよくの生しょうじた人が、もしも欲望を果たすことができなくなるならば、かれは、矢に射られたかのように、悩み苦しむ。

（釈尊『スッタニパータ』七六七 *中村元訳 岩波文庫『ブツダのことば』より）

こたわりか、贅沢か

唐突で恐縮だが、小生、蕎麦が好きである。

といっても、別に本をものしたり、蘊蓄が述べられるほど食べ歩きや食べ比べをしているわけではない。世には蕎麦博士よろしく、どこの蕎麦粉がいいとか、水はどうか、ダシはどこで捕れた何の魚に限るとか、研究熱心な御仁が多いと聞くが、とてもとてもそんなレベルには程遠い。年に一、二度、手打ちなぞに挑んでみたりもするが、いつだってヘボ蕎麦にしかならない。かといって、上達のための努力もしていない。ただ、ふつうに好き、というだけ。

で、昼にはよく蕎麦を食べる。朝も、家を早く出たとき、いや、夜だって、残業で遅くなり、家に着くまでお腹がもちそうにないと思うと、たいてい入るのはお蕎麦屋さん。けどそうした場合、ふつうの蕎麦屋は開店前、もしくは閉店してしまっているから、早朝から深夜まで営業してくれている立ち食い蕎麦屋が頼りとなる。昼過ぎまでに岡山に行かなければならないため、五時半過ぎに家を出た今日も、乗り換え駅のホームでたぬき蕎麦にたっぷりの七味唐辛子をかけて食べてきたばかりだ。

今朝の店はこれまでも何度かお世話になっている。はじめて入ってかき揚げ蕎麦を食べたとき、美味しい！と感嘆した。ここのかき揚げ、立ち食い蕎麦屋

にありがちな、ヘンに油っぽく衣ばかりが幅を利かせたそれとは違い、菌ごたえサクサク、しっかりと噛むことを要求してくるプリプリ小海老がたくさん入っている。もちろん、本命の蕎麦にもコシがあつてよろしい。ちゃんとかつおの香り漂うダシもいい。これで三百五十円ナリでは申し訳ない、ありがとう！と、心の中で最大の賛辞を贈りながらいたたいたのであつた。

で、しばらくぶりで入った今朝。かき揚げはたぬきへ変更したが、それとは関係なく大きな変化があつた。つゆが熱くない、否、ぬるい！のである。人間、熱いと予想されるものを食べる際、唇は器の縁に触れる瞬間、本能的に、最大の警戒感で臨むものだが、それが見事に空振りに終わった。前はこうではなかつた。シヨックだ、大問題だ。「温かいそば」は、熱くなければ美味しくないのである（と、確信している）。あー、熱いのが食べたかった！

厨房に目をやった。井を熱湯の入った寸胴で温め、そこに湯通した蕎麦を入れ、つゆをかけ、具をのせている。ごく一般的だ。いや、違う！ 井を温める時間が極端に短いぞ。つゆそのものの温度も低いのかもしれない。

「熱いつゆを望むのは、蕎麦の食べ方として肯んじられるはずだ。それが蕎麦に対する礼儀というものでもあろう。それとも単に贅沢なだけか、こんな安価

で食べられるだけでよしとするべきか」

イライラぐだぐだ考えているうちに、井は冷めたつゆだけになっていた。食べたとはいふ実感が無い。

うーん……（乗り換えた電車でも、しつこく思案）。何も、そうたいそうな要求ではないような気がする。店側だって、できる範囲での努力はすべきであり、それが良心であり、商売人気質というものではないか。客の反応は必ずそれに比例するはずだ。いや待てよ、立ち食い蕎麦屋は回転がイノチ。熱いつゆに手こずる客を量産しては、営業上よろしくない。そこを考えての方針転換か。しかし、どうせ提供するなら少しでも美味しいものを……。あー、堂々巡り！
こだわりって、なんだろう？ 贅沢って、どこから？ 境界は？
その一線。その曖昧さ。

蕎麦に限らない。我々の日常は、そんなことで溢れている。マジメに向き合おうとするほど螺旋状の罠に陥ってしまう。簡単にコレという答えは出そうもないが、向き合うことは避けちゃならんと、お釈迦さまなら言うだろうなあ。

あらっ、もう岡山。パソコン仕舞わなきゃ。

明後日の帰りがけ、もう一度あそこで食べてみようかな。

（小村正孝）

第四十四回

江戸を歩く



内藤新宿から
渋谷へ

森清鑑

大江戸ウォーカー

内藤新宿

内藤高遠家の初代清成については面白い逸話がある。天正十八年、家康は秀吉の命で江戸に移封される。内藤清成は鉄砲隊を率い、江戸入りの先兵を務める。家康は清成を可愛がっていたらしい。ある日、鷹狩りに出たおり、馬上の家康は言う。「そちが今より馬で駆け巡った土地を与えるぞよ」。清成は愛馬を駆けると怒濤のごとく走った。この馬は駆け巡って戻ってくると息絶えたという（馬の墓あり）。こうして四谷から代々木村に至る二十万坪を承る。酔狂とは云え、家康の太腹を示す話である。それが高遠藩内藤駿河守下屋敷（新宿御苑）である。江戸後期、三万三千石の、この下屋敷は約六万七千坪であるから、清成が拝領した土地は後代にかなり幕府に献上されたことになる。その多くが家臣団の邸宅があった内藤新宿である。

四谷大木戸を出ると内藤新宿下町の密集家

屋が道の両側に建ち並ぶ。内藤新宿下町の右側は広大な百人組与力の大縄地。その西側外れが閻魔様で有名な太宗寺。旅人は境内で江戸六地藏を拝む。そこから先が内藤新宿仲町、続いて内藤新宿上町の家宅が密集する。そしてまっすぐ行けば青梅街道。南に曲がれば甲州街道。いわゆる追分である（新宿三丁目交差点）。追分は街道の分岐点。特にこの新宿追分は有名であった。この四谷大木戸から追分までの町並みの約一キロメートルが内藤新宿である。

日本橋を起点とする五街道それぞれの最初の宿場町は約二里の距離にあった。ところが甲州街道最初の宿場は高井戸宿。これは日本橋から四里。物資の運搬や旅人の足にとっては大変不便であった。そこで元禄十年（一六九七）、浅草の名主、高松喜兵衛が中心となり、この地に新しい宿場を設けて欲しいと願い出る。特に浅草、深川当たりの住人にとっては切実な願いである。勘定奉行はこの願いを聞

き届け、翌年、日本橋から二里弱の距離にあたる、青梅街道と甲州街道の分岐点、追分に新しい宿場を設ける許可を与える。とは言え、実現までは大変で、幕府は高遠藩内藤家の土地を幕府に返上させ、宿場用地とする。一方、高松等の浅草商人は五千六百両という大金を上納する。その上で宿場の整備にかかる。こうして元禄十二年（一六九九）、ついに内藤家の地に新しい宿場、内藤新宿が誕生する。高松喜兵衛はこの名主と成り本陣を經營する。便利だということで宿場は次第に発展する。商家、旅籠屋、茶屋、問屋が増える。そしてご多分にもれず岡場所（色町）が増える。飯守女、茶屋女も増える。ところが吉宗の時代の享保三年（一七一八）、内藤新宿は幕命により廃止される。その理由は結局のところ、遊女取り締まりにあるらしい。その後、高松家は代々、宿場の再開を申し出る。こうして約五十年後の明和九年（一七七二）、ついに宿場は再開。江戸っ子は「明和の立ち返り駅」

と呼んだ。町は賑わいを取り戻し、江戸四宿の中でも品川宿に次ぐ賑わいを見せ、これは明治維新まで続いた。なにしろここは、農産物、鉱産物の集積地。馬の往来が激しく、広重はそこを強調して描いている。江戸の流行唄、「四谷新宿馬糞の中で、アヤメ（遊女のこと）咲くとはしおらしい」。

内藤新宿の家並みを左右に見て追分に出る。





◆広重 内藤新宿 遠方の森は内藤屋敷

直進すれば青梅街道。左に曲がると甲州街道。甲州街道は五街道のひとつ。それに対して青梅街道は脇街道と呼ばれた。ちよつと歩いて玉川上水まで出ると時の鐘を告げる天竜寺。鐘の音は内藤新宿を駆け巡る。鐘の音を聴けば、岡場所で遊んだ人は帰らねばならぬ。そこでこの鐘を江戸っ子は「追い出しの鐘」と洒落た。ここからも玉川上水のこぼれ水がある。それは天竜寺の東壁と内藤屋敷の間を通過して南に下る。この流れは内藤屋敷の西側を沿って流れ、大木戸水番屋から南に下る玉川上水



吐と合流。御焔硝蔵と千駄ヶ谷の田を通つて原宿村を通り、やがては渋谷川（古川）に流れ込む。

天竜寺門前町のはずれに上水に沿つて甲州街道の高札場がある。追分を左に曲がつて高札場までは火除け地とも思える広場になっている。この高札場で甲州街道を行き交う人々に幕府の通達が行われた（新宿駅南口から御苑へ降りて、最初の右側細道の角。先は高島屋）。

渋谷川逍遙歩 源流は玉川上水

玉川上水は多摩川羽村取水堰からはるばる武蔵野台地を東流し、内藤新宿を通り、四ッ谷大木戸から地下に潜り、江戸市中に配給される。水量調節のため余った水は広大な内藤駿河守下屋敷（新宿御苑）の東西の縁から南に流される。これを吐水という。上水の水位を一定に保つ先人の知恵である。実はこれが

渋谷川の源流なのである。内藤新宿天竜寺脇と四ッ谷大木戸水番所から南に下る吐水は内藤屋敷の南で一つになり豊かな流れになつて南に下る。この辺りから川沿いを南に歩くと、左は御硝蔵、右側は千駄ヶ谷の田圃とさらには二万坪弱の紀伊殿観如院の敷地が広がっている。そして所々に千駄ヶ谷町の家並みが点在している。川をさらに下ると竜岩寺の大松が聳え、原宿村到達の目印になる。歩みを進め、穂田村に着くと幾筋かの小川が合流し、川幅はぐんと広がる。あちらこちらに大きな水車がのどかに回っている。渋谷川は穂田村の田畑をうるおし、第六天社（穂田神社）を通り（明治通りの東側）、上渋谷村に至る。そして現在の明治通りを斜めに横切り、宮下公園沿いに出る。そのわずかに先に架かる橋が宮益橋である（山手線渋谷駅前の橋梁の所）。この橋は道玄坂を下つて宮益坂を登るいわば谷底の地形に架かっている。橋の真上から左を見れば急な宮益坂がくねり上がっている。

道幅はかなり広い。広い坂道の両側には民家、宿が密集。縫うように登ると左に御嶽権現の鳥居が見え、その裏には鬱蒼とした森。登り切るとその先は平坦な道となり、右側は伊予西条藩、松平左京大夫の上屋敷（四万坪、青山学院）、左側は稲葉長門守下屋敷（五万坪、国連大学など）。坂からは前方に富士山がよく見え、江戸っ子は宮益坂のことを富士見坂、宮益橋を富士見橋と呼んだ。人々の通行量も多く、橋の坂側には高札が立てられていた。

道玄坂から駒場野へ寄り道

宮益橋のところで西から流れてきた小川が渋谷川に合流している。橋を渡り、逆の道玄坂に向かう。くねくねとした田圃の畦道。周囲は中渋谷村の田や畑で、橋近くの右側に数軒の農家。この畦道から急な道玄坂となる。登ると平坦な大山道である。道の左右に民家があり、江戸後期、道玄坂町（円山町、栄町）となっているが、寒村。しかし宿場もあった。

道玄坂の名の由来には、鎌倉時代の武将、和田義盛の一族、大和田道玄の残党がここで山賊をした、また道玄庵という寺の庵主が家康に由緒を提出した処から等諸説がある。和田義盛といえは、平家追討等で武功を立てたが北条義時の挑発を受け鎌倉で挙兵、討ち死にし和田一族ごとく滅亡している。

道玄坂から三丁ほど歩くと、道は二股に分かれる。本道をそのまま行けば大山道（玉川通り）。江戸の人々が大山詣でをした街道である。右に折れる道は細く、畑の中を蛇行。やがては駒場野に抜ける滝坂道（淡島通り）につながる。この分岐点は、雪旦の絵では右上に描かれ、そのずっと背後の山は現在の南平台、桜ヶ丘、鉢山、代官山辺りと思われる。人一人通れるかと思われる細い道を一人、二人歩いていく。道は畑を突っ切り、次第に山間の道に入る。坂道を上るとやや平坦になり、三田用水（品川上水）の流れを跨いで行くと今度は二つに分かれて南北に流れる空川（そらがわ）を渡

る。蛇行する高い土手道。右側は防風林。田や畑を見下ろしながら歩く。馬子が馬を牽いている。やがて分岐点に来る。雪旦の絵の下半分の光景である。絵の左下、三人の旅人が橋を渡っている。この川は二つに分かれたもう一方の空川である。右側の道の角には横に広がる大きな松の太木がある。一人の旅人がこの松を見上げている。松の中央と右側に道祖神が立っている。この松が一本松である。そしてこの光景が現在の山手通り松見坂交差点付近の昔の姿である。三人の旅人が歩く道をまっすぐ行けば江戸時代の急な坂松見坂。その先は滝坂道（淡島通り）。駒ヶ原御用屋敷（明治期近衛連隊、今、駒場高校など）の北側をなめる。一本松側の道は先ほど分かれた道玄坂から続く大山道に出る。空川はこの道沿いに走り、大山道を渡って中目黒村を通り、目黒川に合流する。松見坂伝説としてこの一本松にも道玄一味が登り、悪さをしたという逸話が残っている。それにしても雪旦は

松見坂から宮益坂までの江戸時代の大きな眺望を見事に正確に俯瞰している。当時の渋谷はこのような田園風景であった。

再び渋谷川を歩く

一本松側の道を大山道に出て左に曲がる。急な坂道で有名な大坂を下るとすぐに眼下に三田用水が走っている。渡って再び道玄坂を下り宮益橋に戻る。橋の左下に高札。これから渋谷川は現在の東横線渋谷駅をなめ、さらに線路伝いに恵比寿方向に流れている（現在の渋谷警察署前の歩道橋を渡り、降りると東横線の高架。そこから川は地中から



◆江戸名所図会 雪旦「富士見坂一本松」(一本松から富士見坂を俯瞰したという意味) 左上富士見坂(宮益坂)、坂下に流れる渋谷川。絵の上中央、道玄坂を登ったところ、右にかけて大山道。右上二股道。雲に遮られ、絵の右下一本松、左下空川を渡る旅人(松見坂付近)。

表に出ている)。

金王八幡宮

ここから畑と渋谷川沿いの道を恵比寿方向に歩く。小板橋、板橋を過ぎると金王下橋(現、並木橋)である。橋の右側は並木前。代官山方面に並木が続いていたのだろう。金王下橋の左からは急峻な坂が迫り上がっている。坂の右側一帯は八千坪に及ぶ福岡藩黒田美濃守の中屋敷。そして左側は中渋谷村の農地に続いて金王八幡宮の門前町。黒田屋敷の北から西に参道があり、門前町を抜けると正面に八幡宮の瀟洒な社が見える。江戸時代、金王八幡宮は今よりずっと広く、南北に広がる桜の名所。ここは渋谷氏歴代の居城跡で、辺り一帯の高台が平安末期から渋谷氏一族の居館であった。城内の一角に渋谷八幡宮が創建されたのが一〇九二年。時を経て、一族の渋谷金王丸は源義朝に仕え、保元の乱(一一五六年)で大功を立て、名声を得て以後、金

王八幡と称するようになった。江戸時代には、春日局が三代将軍家光の実現を祈願した宮として有名である。春日局は江戸城から当宮に頻繁に祈願したといわれ、甲斐あつて家光は無事に三代將軍に就く。このことを聞き及んだ家光は後に社殿を造営している。ここは江戸期、桜の名所でもあり、芭蕉も桜の季節に訪れたらしく、神社前の巨木、通称金王桜の隣に「しばらくは花の上なる月夜かな」の句碑を残している。

【参考文献】

江戸明治東京重ね地図 中川恵一編
江戸史跡事典 新人物往來社 など

法然上人を
めぐる人々

極樂に
歸つた
法然上人

挿画・佐野芳朗

石丸晶子

◆
第
二
回
◆



七

ここで、平安時代初頭、伝教大師最澄が開いた延暦寺について述べておこう。

延暦寺は標高八四八メートルの比叡山全域を境内とする天台宗の寺院であるが、延暦寺の名前よりも比叡山、或いは叡山と呼ばれることが多く、標高の割に山は深い。

また古文で単に「山」とか「お山」といえば、それは叡山を指している。

冬の厳しい寒気と年間を通じての湿気が叡山の名物だという。この気候に多くの僧が苦しみ、結核にかかって死んだ者が多かったと記録されている。

山内は東塔・西塔・横川の三つのエリアに分かれ、総称して三塔といい、さらに細分して「三塔十六谷二別所」という。

※三塔十六谷二別所

東塔・北谷、東谷、南谷、西谷、
無動寺谷

西塔・東谷、南谷、南尾谷、北尾
谷、北谷

横川・香芳谷、解脱谷、戒心谷、兜
率谷、飯室谷

別所・黒谷、安楽谷

祖師最澄をはじめ、叡山は多くの聖僧名僧を輩出した。

・日本天台宗の基礎を築いた第三代座主慈覚大師円仁。

・天台密教の充実に努め園城寺を再興した第五代座主智証大師円珍。

・叡山中興の祖慈恵大師良源。

・『往生要集』の著者恵心僧都源信。

・融通念仏の開祖聖応大師良忍。

・天台座主にもなった『愚管抄』の作者慈鎮和尚慈円。

・
・
・

また次の大師や国師は、若き日に叡山で学び、その後、山を下りてそれぞれの宗派を開いた人々である。

日本の浄土宗の開祖円光大師法然。

日本の臨済宗の開祖千光国師栄西。

浄土真宗の開祖見真大師親鸞。

日本の曹洞宗の開祖承陽大師道元。

日蓮宗の開祖立正大師日蓮。

まさに目も眩むばかりの名僧の輩出だが、本来叡山の修行は厳しかった。

最澄は、比叡山で修行する者に十二年間の籠山を命じた。籠山では好相行が義務付けられ、これを満行しなければ満行の許可が下りない。

好相行とは最澄の墓のある浄土院の拝殿で如来の好相が得られるまで毎日、一日三千回五体投地を行う。

この十二年籠山のほかに山内の院や坊の住職になるための三年籠山というものもあつ

た。一年目は浄土院で最澄の墓の世話をする侍真の助手をし、二年目は百日回峰行を、そして三年目は常行堂もしくは法華堂のいずれかで九十日間修行をする。

常行堂で行う修行（常行三昧）は本尊阿弥陀如来の周囲を歩き続けるもので、念仏を唱えることは許されているが、基本的には止観Ⅱ瞑想の行である。九十日間横になることは許されない。一日数時間、手すりに寄りかかって仮眠をとるのである。

法華堂での九十日間の修行は「常坐三昧」といわれ、ひたすら坐禅を続けてその姿勢のまま仮眠をとる。

そして九世紀に僧相応そうおうによって始められた千日回峰行。

この行は百日回峰を終えた者の中から選び出され、行者は、途中で行を継続できなくなった時は自害する覚悟で、無動寺谷で勤行の後、毎日深夜二時に真言を称えつつ出発する。いでたち姿は、まだ開いていない蓮の花を

模った笠をかぶり、草履ばきに白装束。

彼は東塔、西塔、横川、日吉大社……と二百六十カ所で礼拝しながら、携帶物として許されているのは首を括るための麻紐（死出紐）と両刃の短剣の二つのみ。

五年間七百日の回峰を満行できたとしても、その後にはより苛酷な「堂入り」が待っていた。そこで行者は「生き葬式」を行って「堂入り」し、残りの三百日の最終修行に出演するのである……

この回峰行がいかに苛酷なものであるかは、回峰行開始以来千三百年近い歴史の中で、満行者として今日まで四十七人が記録されるのみということでも察しがつくというものであらう。

十三歳の法然上人が登っていった比叡山とは、一日中ただ読経していればいいというところではなく、千日回峰は別としても、このような修行に耐えなければ一人前の僧になれ

ぬところであつた。貴族出の僧の場合は実家からつれてきた若者が身代わりになって諸々の行を行っていたが、法然上人をはじめ多くの者は、みずからこれらの修行に耐え抜くか、死して叡山の土となるかのいずれかであつた。

八

「そなたのことは功德院の阿闍梨様から聞いておる。功德院におれば阿闍梨様のご推挙で座主職に就けたかも知れぬものを。なにゆえにまた、ここに来た」

深い樹木に覆われた比叡山の別所黒谷の住持慈眼房叡空は十八歳の青年を見て訊ねた。

どちらかといえばこぼこした頭頂。背の高い頑丈そうな身体。背の高さに応じて大きな丸い顔。

憂いを含んで澄んだ大きな目がじっと叡空を見上げて両手を床についている。

その身体全体からは初々しい少年のような



清潔感が漂っていた。

世慣れて瀟洒な体つきの貴族の子弟とは大分違うな、と思いながら叡空は重ねていった。

「ここの修行は辛いぞ。今までどれだけの弟子が修行が辛うて逃げ出したか知れぬ」

聞こえるか聞こえないかの小さな吐息をふつと叡空は漏らした。

「再度聞くが何ゆえにまたここに来たのか。そなたも知つていようが阿闍梨様は叡山切つての学僧でもあられる。阿闍梨様のもとにあれば、学問も磨けよう。公卿たちとの縁故も開けるのだ。座主職にも就けたかもしれない。あそこに居れば前途洋々じゃ」

叡空は青年を諭すように言った。

「しかしここは功德院とは別の世界ぞ。世間一斉の名利を捨て、ただ如来の教えを悟ることを目的にして修行するのみ。して如来の教えとは世間の道とは違っておるのだ」

両手を床に付き、頭を下げてただじっと聞いている青年を見下ろしながら叡空はため息

をついた。

「ここに来たのを後悔する気持ちが些かなりともあるならば、今のうちぞ。わしがそなたとともに赴いて阿闍梨様には詫びを入れよう。そなたの人生の分かれ道じゃ。誰にも遠慮はいらぬ。自分の心に今一度、しっかり問うてみるがよい」

強い口調で叡空は言った。

「お師匠様」

青年は顔を上げた。

「黒谷様のお弟子とさせていただきますのに、いささかの後悔もありませぬ。わたくしは、父の最期のことは忘れがたく、両親の菩提を弔い、わたくし自身の出世間の道を生きるために叡山に参りました。初めから、わたくしに榮達などは無縁のものでございます」

「……」

しばし、無言のうちに叡空は青年をじっと見つめた。憂いの中に、嘘偽りのない真摯なまなざしと意志の強さを秘めた青年の心が、

叡空にもたしかに伝わってきた。

深い、そして張り詰めた沈黙の時間が流れていた。

「今からそなたはわしの弟子じゃ」

張りつめた沈黙のなかでふいに叡空はいった。

「そなた、わしの弟子となるからには名を持たねばならぬが、叡山における最初の師源光様とわしの叡空から一字ずつとって、今から名を源空と改めよ」

音もなく風が吹いてきたらしく、秋の木の葉が師弟二人の間に舞い散ってきた。

「次に房名を考えねばならぬが、さて、どうしたものかの」

平伏したままの青年を叡空はしばし見つめた。とふと思いついたろうに、

「經典に『法然道理』というのがあるが、その年齢で出離の心を早も起こしたとは、まことにそなたは『法然道理』の聖じゃ。今から法然房と名乗るがよい」

九

以来、黒谷に隠遁する青年僧法然房源空となった法然上人の厳しい求道の歲月が始まった。

千日回峰行をされたかどうかの記録はないが、叡山のありとあらゆる修行と学問に身を投じ、ひたすら道を求められたという。

記録によると、天台三大部の經典に留まらず、現代のページに直して十万ページに及ぶ一切経律論（經藏。律藏。論藏）の章疏しょうその卷舒（經典やその注釈書を巻いたり延ばしたりして繰り返して学ぶこと）に倦むことがなかった。

法然房の求道の心はさらに和漢兩朝や古今諸聖の伝記にまで及んだ。

叡山に来て十二年が経った。最澄が命じた「籠山十二年」である。

法然房は二十四歳になっていた。しかし、

いまだ悟りには遠く、彼はひとまず山を下りて求道成就の祈願をこめ、当時、朝野貴賤の尊崇を集めていた嵯峨の釈迦堂に七日間參籠することにした。その後南都にまわり、宗派は異なっても諸先達に教を乞おう。

その数年前から、洛内はもとより時代全体が騒然としていた。いつ何が起きても可笑しくない不穏な、血生臭い空氣が立ち込めていた。

朝廷内部では鳥羽法皇と崇徳院の怨念の対立があり、摂関家内部でも忠通と頼長の対立。そして源氏の内部では激しい対立と殺し合いが始まっていた。

保元元年七月、権力を振るっていた鳥羽法皇崩御。

そして法皇が崩御されるや、幾日もしないうちに亡き法皇側と、これに対して崇徳院側との闘いが始まった。

いわゆる保元の乱である。

以後、平治の乱、平家の栄達、源平合戦、

平家の滅亡、源氏による武家政治の開始……と続く大激動、大内乱の時代へのスタートであった。この間わずか約三十年。

遂に保元の乱が始まったのは、籠山十二年を果たした法然房が一時山を下りる準備をしていたさ中であつた。

騒乱が一応の鎮まりを見せた十月、二十四歳の青年僧は山を下りていった。黒谷から走出道をつたって大原に出、そして嵯峨の釈迦堂に行く。大原から釈迦堂までは三十キロほどの道のりであつた。

黒谷にも過去数年におよぶ洛内外の騒動は聞こえていた。しかし実際に山を下り、釈迦堂に籠ってみると、朝廷はじめ支配層の内部抗争によって政治は乱れに乱れ、庶民たちは初めから置き去りにされていた上、内乱のとはっちりを食った庶民たちの悲惨は言語を絶した。

鳥羽法皇側、崇徳上皇側、それぞれ両陣営から雑兵に駆り出されて手足や鼻を失った者

も居れば、夫や子どもを内乱で亡くして泣き喚く女性たち。家族から見捨てられて釈迦堂に集まって物乞いをするハンセン病患者たち……

彼ら内乱の犠牲となった多くの庶民たちが、釈迦如来の慈悲を求めて周辺にたむろし、或いは堂内に入って祈っていた……

あちこちに放置された死体を犬が漁っている。

親を亡くし、或いは見失った子どもたちの泣き騒ぐ声がする。

男たち、女たち、そして男と女が言い争う声も聞こえてくる。

むっとする物が腐った臭いと血の臭いが入り混じる中を、物売りの商人たちが金持ちらしい参詣客目がけて握り飯や数珠や小さな仏像などを売りつけていた……

浄土誌上句会



●水温む

〔特選〕盗掘の跡ある古墳水温む

斉田 仁

古墳には埋葬されたものが、完全に残っているのは少ない。これも明らかに盗掘された跡が見える。「水温む」は、古墳を囲む堀があるのか、近くの池か。とにかく歳月は巡って、今春が来ているのだ。

〔佳作〕沈むものかすかに見えて水温む

鳥羽 梓

朝焼けの島に鵜の群れ水温む

井村 善也

孫の靴洗う雛の手水温む

浜口 佳春

●鳥雲に

〔特選〕島影を廻れば港鳥雲に

石原 新

「島陰」でなく「島影」とあるから、今は島の北面を見ながら船にあるのだが、降り立つ港には、多分日の光が燦々と降り注いでいる

に違いない。知らない土地に着く前から、心の弾みが読み手に伝わってくる。

〈佳作〉

庭を掃く手をとめており鳥雲に

森 懐人

頭頂のツボを押しけり鳥雲に

笠井 亜子

椰子の木の高々と伸び鳥雲に

増田 信子

●自由題

〈特選〉

若布竿大きくしなり潮垂るる

さとうゆう

この頃、ほとんどを養殖に頼っているが、これは天然の若布である。箱眼鏡でのぞき、竿に巻きつけて引き上げる。今正に舟に若布を揚げるところである。竿は若布と自体の重みで、大きくしなっているのである。

〈佳作〉

うららかに電車ごっこの紐ゆけり

目黒 裕

杖ついて犬連れ歩く春の午後

山口 信子

鯉痩せて静かに浮かぶ菜種梅雨

寺下 忠至



誌上句会〈編集部選〉

■水溫む

水溫むベンチに翁一人おり
朝日受け茂吉の墓処の水溫み
水溫み川藻の揺れに淀みけり
軽々と家鴨の歩み水溫む
東京や腰を下ろせば水溫む
水溫み始める朝のモーツアルト
水溫み九官鳥は連呼する
水溫む太鼓橋から空見えて
仰向けの亀の子東子水溫む
今日もまたかくありにけり水溫む
あぶちゃんを着た地藏さま水溫む
仏壇にかき揚げひとつ水溫む

森 懷人
佐藤雅子
石原 新
増田信子
村田 篠
笠井亜子
柏木貞華
近 恵
工藤 掉
齋藤那美
横山文子
熊谷敦子

■鳥雲に

病む夫の足さすおれば鳥雲に
鉛筆の芯のやわらか鳥雲に
百円で煎り豆買いて鳥雲に
鳥雲に入る仏壇の大掃除
鳥雲に泰平楽な姉の靴
我儘な天動説や鳥雲に
鳥雲にシャワー温度の目盛変え
鳥雲に入る寸前の通信簿
鳥雲に乗客はみな携帯に
おめかしを終えた花嫁鳥雲に

■自由題

秩父路や蠟梅の香の馥郁と
月命日ならば仏飯五加木飯
夢のなか夢のまた夢母の夢
菜の花の海を開いて進むべし
三月の人差指に苺ジャム
駅を出てより観梅の顔となる
赤ん坊のクシャミのごとく梅こぼる
母を待つ卵が二つ春の雲
たこ焼きを噛めばはみ出て春の雲
白梅咲く一緒にいてもいいですか
白梅や空に汀のあるごとく
桃の日ややけに混み合う太鼓橋
桜餅いのちを二つ置くとく
春の朝いぶりがつこの刻み方

佐藤雅子
村田 篠
鳥羽 梓
斉田 仁
千駄木敏郎
工藤 掉
月島駄々
内藤隼人
十和田有希
柴田早苗

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇二二年六月二十日

発表・『浄土』二〇二二年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

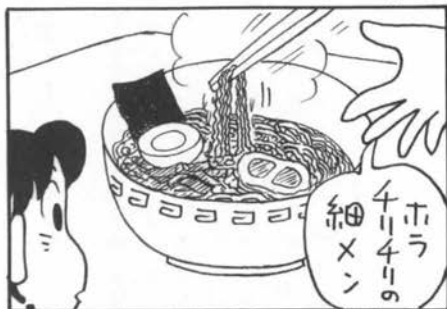
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

森 懷人
佐藤雅子
飯島英徳
志藤 治
工藤 掉
村田 篠
笠井亜子
月島駄々
近 恵
小林苑を
三宅月彦
鳥羽 梓
十和田有希
鈴木真理子

91 かい目 さっちゃんはネ...

かまちよろう



竜巻に震えし人を見る世かな

岱潤

先日東京教区布教師会の新聞に載っていた福田行慈師の文がおもしろかった。福田氏はご存じの通り福田行誠師の遠縁に当たられ、『福田行誠全集』の責任編集を勤められる行誠上人の研究では第一人者であるが、彼が行誠上人の江戸弁について書かれていた。上人は飾ることなくストレートに江戸弁で会話されていた

そう、その法話も大変ユニークであった。東北を巡教されたときなどは、通訳を混じえたほどだとおっしゃっている。その行誠上人が前田氏が今月号で書かれてるように各宗派の教えを広く学

ぶことを第一に説かれていた話は大変興味深い。得てして今の若い布教師さんたちの多くが法然上人一途になっている姿をよく見るが、行誠上人や連載している海旭上人に学んでいただきたいと心から思う。

また前田氏が上梓した『紫雲の人、渡辺海旭』の中にある話だが、行誠上人が臨終の前日、『明日は法然上人の御忌だから、わしもそろそろ往生しようと思う。掛け物をかえてくれ』と法弟に頼んだところ、法弟は気が動転して来迎図ではなく閻魔大王の図をかけてしまった。これを見た行誠上人は破顔一笑して筆をとり、発信人は閻魔大王、宛先は極楽浄土の二

十五菩薩の役所で、どうぞ往生人を迎えてくれという書状を書いたという。八十四歳にしてこの洒脱さ、恐ろしいまでの偉大なご上人であつたと思う。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十八巻六月号 頒価六千円

年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十四年五月二十日

発行 平成二十四年六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了昭

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三(五七八)六九四七

FAX 〇三三(五七八)七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

雑誌「浄土」
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 北山大超(焼津・光心寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 糸原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 脳博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山・光明寺)
 山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略、五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪

千ひろ

京都祇園

桜や紅葉の混雑を避けて訪れるのは、京都祇園の『千ひろ』。

主は祇園名店『千花』の永田基男氏の次男、永田裕道氏。

辻留で修行し、先代の『千花』で修行を積んだのち、祇園の北側小路を入ったこの場所に店を構えた。

磨きぬかれた八席の白木のカウンター。美しい骨董の器、凜とした空間。食の舞台の幕が上がると、主は素人の質問に丁寧に応えて和ませてくれる。初めて食した焼きホタテと巨峰酢という、魚介とフルーツの驚きの組み合わせの美味しさ。甘みと脂分がのった鯛や鮪のお造と、自家製の塩昆布の調和。厳選された素材にかかる黄身酢や玉味噌の味は、極上である。そして、そして、この店一番のお椀の出汁の深い旨味。水菓子代わりのリンゴとオレンジの生ジュースがメになり、日本料理の醍醐味といえる引き算の『千ひろ』の料理を堪能させていただいた。余韻を残してお店を後にすると、永田氏の「おおきに」の声が小路に響いた。



永田裕道氏

京都市東山区祇園北側279-8（祇園ホテルの真向かい小路入る）
電話 075-561-6790（できれば予約）
月曜休（祝日営業）12時～13時、17時～20時半（共に入店時間）
昼夜コース12000円、15000円、18000円

アイエムが目指す 「寺院ルネッサンス」とは…

日本人の心があぶない！ そう感じたとき
寺院と周縁のはざままで活動する私たちアイエムに
ひとつの気づきがありました。

「寺院とは地域の人々の“苦”と向き合い

“学び・癒し・楽しみ”があり、人々を

元気にしてくれるところでなければ」と。

このような寺院と周縁の間に新しい信頼関係を築く

支援活動が、寺院ルネッサンス活動なのです。

今、アイエムでは寺院から地域・周縁への

各種文化発信行事の開催を

支援致しております。

お堂コンサート



寄席



お堂能

創業
30年

周縁と寺院を結ぶ
株式会社 **アイエム**

東京都中央区京橋 2-8-1 八重洲中央ビル
Tel. 03-3535-5555 Fax. 03-3535-2730

インターネット **アイエム** で **検索**